

地域愛着を育成する教育の研究

子どもを取り巻く環境に着目して

○平木 里奈*¹・石野 陽子*²

(*¹島根大学教育学部学校教育課程 I 類・*²島根大学教育学部)

目 的

近年、急激な社会の変化に伴い、学校と地域を取り巻く環境が複雑化・多様化してきている。その中でも特に地域社会における支え合いやつながりの希薄化による地域社会の停滞や教育力の低下などが指摘される。文部科学省は、「社会に開かれた教育課程」の実現に向け、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動を推進し、学校と地域が一体となって子どもたちの成長を見守る体制づくりを図っている。地方自治体でも、将来にわたり活力のある社会を維持していくため、将来の地域づくりの担い手となる子どもたちに地域愛着や郷土愛を醸成する取り組みが実践されている。しかし、これらの取り組みは顕著な成果は報告されておらず、現状では効果的な愛着形成策は確立されていない。

地域愛着に関する研究は、社会心理学、環境心理学、都市計画分野など様々な分野で研究されている。先行研究では、肯定的な生活環境評価（石盛, 2004）、日常的な地域住民とのコミュニケーション（稲垣, 2023）などが地域愛着の醸成に影響を与えることが分かっているが、子ども時代の経験や教育に着目した研究は行われていない。そこで本研究では、子ども時代のどのような経験や環境が地域愛着を醸成するか、その規定要因を明らかにすることを目的として研究を行う。

方 法

調査対象者 島根大学の学生 **調査時期** 2023年11月 **調査方法** 質問紙調査 **調査内容(1)定義**: 地域愛着は、先行研究に倣い、「人と地域を結ぶ情緒的な絆や繋がり」と定義する。地域の範囲は、「居住地を中心とする日常の生活行動圏」とする。質問紙には、子ども時代に主に過ごした市町村を記入してもらい、地域愛着の対象となる地域を設定する。また、その地域に住んでいた年齢と居住年数を尋ねる。**(2)地域愛着尺度**: 渡辺（2017）の地域愛着（物理的環境）と地域愛着（社会的環境）の2因子11項目、荻原（2005）の地域愛着（感情）2項目、持続願望2項目、稲垣（2023）の地域へ

の貢献意欲・態度の3項目を加えた、計18項目。「とてもそう思う」から「そう思わない」の4段階評定。**(3)子ども時代の経験や環境**: 子ども時代の経験や環境を学校レベル、個人レベル、ネガティブなもの3つに分類。学校レベルの項目は、地域学校協働活動の取り組みを参考に筆者が設定。個人レベルとネガティブなものは先行研究を参考に筆者が設定した計27項目。経験の有無と、その印象の程度について、「経験が無い」から「かなり印象に残っている」の5段階評定。**(4)愛着スタイル**: 当人と他者との関係に適用される愛着理論を、住民と地域との関係に当てはめ、「自分は地域に必要なとされる価値があるか」を自己観、「地域は自分の期待に応じてくれるか」を地域観と定義し、地域愛着を自己観と地域観による2元4象限で捉える方法を実践した関根（2023）に倣い、愛着スタイルと地域愛着醸成の関係性を明らかにする。質問項目は、それぞれの定義を参考に、3項目ずつ計6項目を設定。「そう思う」から「そう思わない」の4段階評定。

結 果 と 考 察

地域愛着と各質問項目の相関係数及び p 値を TABLE1 に示す。子ども時代に学校レベル、個人レベルそれぞれにおいて地域社会や地域住民と関わる経験をしており、それがより印象に残っている人の方が強い地域愛着を抱いていることが言える。一方、地域愛着と地域とのネガティブな関わりにおいては、ほとんど相関が見出せなかった。愛着スタイルの自己観と地域観に関しては、地域への愛着を直接的に尋ねた直接愛着度と正の相関があるという先行研究結果を支持する結果となった。特に、地域観は地域愛着の醸成に影響を与えていることが言える。

TABLE1 地域愛着因子と各質問項目因子の相関係数及び p 値

	学校レベル	個人レベル	ネガティブ	自己観	地域観
相関係数	.53	.51	-.20	.64	.85
検定統計量	1.98	1.87	.65	2.63	5.10
p 値	.08	.09	.53	.02	.00